
デウ

さすらい物書き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デウ

【Nコード】

N3163A

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

何でも屋“デウ”を生業とする3人兄妹　兄ブランク28歳、その弟アスキー23歳、そして、133番街の“死の女神”ララ14歳。一発の銃声がして、ブランクは自分が下っ腹に銃弾を受けたことに気づいた。

(前書き)

柚猫先生と、「秘密基地」のサイト管理人様に捧げます。

いい音がした。

人を動かないものに変えちまうときの銃声ってのは、いつも乾いた重い、渋い音がする。

ただ、この音を聞くシチュエーションが、いつもとは違った。恥ずかしながら、撃たれたのはこの俺だ。

右の下っ腹　へその斜め下あたりか　に弾が当たってる。幸い、貫通しているようだ。痩せててよかった。

左手で腹を、右手でその裏つかわの背中を押さえる。

ひざが折れる。吸ってた煙草が口からこぼれる。

地面に倒れる。

どうやら動けそうになかった。

ちっ、アスキーートのドジがいつかこんな事態を招くんじゃないかって思ってたぜ……。

気が遠くなる。アスキーートが動揺した声で何か叫びながら走り出すのが聞こえる。

まいったな……。ガキの頃遊んでた裏通りの景色が浮かんだぞ。

仲間の顔が見える。走馬燈つてやつか、これが……。

まあいい。28年間分のフラッシュバック。楽しむとするか……

……

………と思ったが、一向に走馬燈の続きは展開しなかった。

その代わりに、今朝の出来事　仕事のクライアントの声が、遠くから聞こえてきた

* * *

「ブランク。これでなんとか引き受けてくれ」

「……その条件じゃ受けられんな。俺たちは3人で仕事をする。――

人30万。計90万だ」

俺が、仕事を持ってきた体格のいい眼鏡の男にそう答える。

「ブランク。云々とくが本当に全部で40万しか用意がないんだ。それで嫌ならよそ当たるぜ？」

いい気になつてもみあげを伸ばしている男の濁った眼を睨みながら俺が云い返す。

「よそに行つてくれ、割が合わん。だいたい俺たちは一般的な“デウ”だ。殺し専門じゃない」

「殺しも何度か請け負ったことがあるつてのは知ってるんだよブランク。じゃあ40万で頼んだぜ」

「話は良く聞けよハツシユ。俺たちは、その条件じゃ受けない」俺は短くなつた煙草をもみ消し、吸い殻容れにしまふ。「……ハツシユ、お前さん、監獄の方に知り合いがいたよな」

「……なんでそれ知ってる」

「企業秘密だ。……ま、弟のアスキートの野郎が顔が広くてな、いろいろとうわさ話やら隠し事なんかを集めてくるんだ。それで知つた。そこにぶち込まれてるテューシーって娘を免罪にして逃がしてくれ。そしたら60万に値引いてやる」

「だれだ、そのテューシーって女？」

俺はその日の朝俺にすがってきたアスキートの顔を思いだす。

ばかばかしい。なんで仕事の交渉に、弟の惚れた女の釈放なんていう条件を盛り込まなくちゃいけないんだ？

* * *

「ブランク兄さん」

はしゃいでなくてもはしゃいでるように聞こえる妹の声が背中からした。

「ララ、めしは食ったか」

ばさばさの髪で起きてきたララに聞く。

「おいしかった。あれ好き。なんていうのあれ？」

ヒヨウ柄のパジャマ姿のララ。14歳の子どもにしてはかなりずれたセンスと思うが、それ以外はただの子どもだと、いつも思う。この133番街で“死の女神”の通り名で呼ばれている彼女のこんな無防備な姿を街のやつが見たらなんとコメントするのだろう。

はちみつ色のまつすくな髪の色。目のまわりとくちびるはさくら色で、淡い、儂い印象もある。だが実際は毎日欠かしたくない筋力トレーニングと日々の過酷な簡単なときもあるが、デウの何でも屋としての仕事で、ララの体軀は小振りのマシンガンのように鍛え上げられている。

「パンにコーンポタージュをしみ込ませて油で揚げただけだ。それより、もう4時だぞ。日が暮れる前には出かける。準備を急げ」

「あたし、ゆで卵は半熟がやっぱり好きだな。兄さんのはいつもかちかちに固まってて黄身がばさばさするよ」

「何度も云わせるな、ゆで卵はきちんと茹でてこそゆで卵だ。それより、本当に急げ。今日は殺しの依頼なんだぞ」

「はい」

ララがあくび混じりの返事をしながら部屋へもどっていく。

女の支度は男の俺たちの10倍以上時間がかかる。さて、その間に俺は銃の手入れをしておくか……。

窓の外を、高架鉄道の電車が走り抜け、安い椅子と机をぎしぎしきしませた。

* * *

「ブランク。今度の報酬でオレ、しばらく77番街に行ってきたいかな？」

23歳には見えない、まだ未成年のような頼りない顔の弟を睨みつける。

「そんな目で見んなよ兄貴！ ここんとこ忙しかったろ？ オレだ

って休暇がほしいよ」

「テューシーって娘としつぱり楽しもってことだな」

……ふう。煙草が吸いたくなってきた。

「い、いやあ、まあ、あの、あれだ。……まあぶつちやけて云えば
そうだけどさ。きれいなんだぜあのコ！！なめらかなコーヒ
ー色の肌！カールした琥珀色の長い髪！まっ赤でぷっくりした
唇と純白の白い歯！！今度会わせてやるよ！」

「刑務所にいたんだろ。長い髪はたぶん短く刈り上げてるし、唇が
赤かったのは口紅を塗ってたからだ。それに“純白の白い歯”って
いう云い回しは馬鹿っぽいからやめろ」

俺は煙草を取り出し、火をつけた。

「なんでそんな不機嫌なんだよ！いいだろ？ブランク」

「77番街か……」

俺もまだ光画でしか見たことないが、77番街にはある季節だけ
に花を咲かせる「さくら」って樹がずらりと並んで、花びらが散
るときにはめつぽうきれいだという話を聞いたことがあった。

その景色は、見てみたいかもな。

「……勝手にしろ。それに不機嫌なんじゃなくて、集中してるだけ
だ。お前もそろそろ集中しろ。情報収集だけがお前の仕事じゃない
んだぞ」

「……了解」

アスキーートの表情が、すっ……と締まっていく。この顔になって
れば、仕事はうまく行く。……はずだ。

132番街のループスクエア通り。通称“腰抜けアベニュー”で
獲物がやってくるのを待つ。

アスキーートの情報どおり、時間ピッタリに店の裏口のドアから誰
かが出てきた。

「……ちがう。ヤツじゃない」

アスキーートがそう云った。

確かに、特徴と違う。3人のたっぱのある男たちに囲まれて、辺

りをきよるきよる見渡しながらヤツ　　今回の標的であるジエブと
いう男　　が姿を現した。

「まずいな、どうする？」

アスキー트가俺にたずねる。

「様子を見る。俺が近くに回り込む。お前は連絡を待て」

アスキー트가そう告げると、俺は階段を音が鳴らぬよう静かにお
りていく。

下まで降り立った。

月明かり。今日はほとんど満月だ。

建物の上に、黒い革の、マントのように長いコートを着たララの
姿が見えた。

標的とその取り巻きたちが移動をはじめる。

なにか違和感がある。なんだ？

原因不明の不安が頭をよぎった。何かまずい。

直感的に引き返した方が良さそうだと思い、俺はアスキーとラ
ラにそのことを伝えようと思った。

そのとき。

いい音がした。

銃弾が放たれる音。

音のした方を振り返る。

女が立っていた。手には銃が握られているのが見える。

撃つたのは　　琥珀色の短い髪、コーヒー色の肌、唇にはまっか
なルージュ

女は笑った。白い歯が街灯の灯りに光ったような気がした。

人を動かないものに変えちまうときの銃声ってのは、いつも乾い
た重い、渋い音がする。

撃たれたのはこの俺だ。

右の下っ腹　　へその斜め下あたりか　　に弾が当たってる。幸
い、貫通しているようだ。……痩せててよかった。

左手で腹を、右手でその裏っかわの背中を押さえる。

ひざが折れる。吸ってた煙草が口からこぼれる。地面に倒れる。どうやら動けそうになかった。

「テューシー どうして……?!」

アスキー트가震える声でつぶやいているのが聞こえた。……なに？ こいつがさっき云ってた“きれいなあのコ”なのか？

女はちよつと低めの声で話しはじめた。

「いろんないきさつでさ、スマートじゃないけどあんたにこの仕事頼んだら免罪がうまく行くなって知ってさ」テューシーは短髪の頭を「ごしごしさすりながら話を続ける。

「あんたたちが狙ってたジエブって男はあたいの前の男でさ。まだ利用価値があるから殺させない方がいいかなと思って。んで、ブランドクさん。あんたが2年前殺した男、いたでしょ。覚えてないだろうけど。あれ、あたしの兄貴だったんだよね。ま、それはいいんだけど、あのあとあたいたい生活に困って苦労してさ。なんだかんだで捕まって監獄行きになったから、一応お礼しときたくてさ」

赤い唇をゆがませて女は嗤った。

「んだもんであんたの弟に近づいたってわけ」

淡々とテューシーは俺たちに説明しながら、さらに銃口をこちらに向けて構えた。

ちっ、アスキー트의ドジがいつかこんな事態を招くんじゃないかって思ってたぜ……。

気が遠くなる。アスキー트가動揺した声で何か叫びながら走り出すのが聞こえる。

まいったな……。ガキの頃遊んでた裏通りの景色が浮かんだぞ。

仲間の顔が見える。走馬燈つてやつか、これが

気が、遠くなる

遠くで……。いや、すぐ近くで乾いた渋い音が聞こえた。

目を開く。

俺は、生きているようだ。

「ぐう……！」

嫌な声で女がうめく声が聞こえた。

テューシーが、地面に崩れ落ちていくのが見えた。その向こうに膝上まであるロングブーツ。黒い短いスカート。黒い革のコート。黒ずくめの“死の女神”の姿があった。

* * *

しばらく気を失っていた。

目を開けると、アスキーと見たことのない男がいた。

俺はベッドの上に寝ていた。

「兄貴、気がついたか！」

アスキーが涙声で叫んだ。

「出血は止めました。当たり所が良かったので1週間もすれば包帯もとれるでしょう」

男は医者のように言った。

「腕のいい外科医だ。オレの情報ではこの街一番の医者だ」

アスキーが自慢げに 懲りない男だ 紹介する。

「で、あのテューシーって女とジエブはどうした」

「ああ、それなら問題ないよ。ララが 「アスキーの声をさえぎってドアが開く音が響いた。」

「おにいちゃん!! 大丈夫?!」

ララだ。そういえばララはあわてると俺のことをおにいちゃんと呼ぶってことを思い出した。

「俺は大丈夫だそうだ。 ララ、うまく処理してくれたみたいだな」

「うん! ジエブは殺した。お兄ちゃんを撃った女も殺したよ」

黒い革のコートに、黒い短いスカート。膝上まであるロングブー

ッ。黒づくめの死の女神の格好をした14歳の少女が、仕事の報告をしていた。

「よくやったな」

俺はララの髪の毛をくしゃくしゃとかき回してほめた。

「えへ。ララえらい？」

「偉い。アスキーにも見習ってもらいたいもんだ」

「……あのお。治療は終わりましたので私はこれで失礼いたします」
医者が会話に割り込んだ。俺が礼を云うと、医者は退席した。

「アスキー。治療費は渡したのか？」

「渡したよ。17万8千つて、ちよつと高すぎるけどよ。命には代えられねえしな」

「17万……?! アスキー。今回のお前の報酬は2万2千だ。交渉は受けつけないぞ」

「げえ?! ……まあ、仕方ねえか」

アスキーは落ち込むのはいが、立ち直るのはいが。

「アスキー兄さんはお金持っても無駄遣いしかないからいいじゃん」

ララが楽しげにそう云った。

「ララ。今回は特別に俺がごほうびをやるう。なにがほしい」

「ごほうび? やったあ!! そうだなあ、なにがいいかなあ……」

ララはさくら色の唇をすぼませて数秒考えたのち、俺に答えた。

「半熟たまごが食べたい!!」

「……………なんだか無性に煙草が吸いたくなってきた。」

(後書き)

この作品は、「小説になろう」秘密基地」サイト様の、「小説のヒント」のコーナーで、柚猫先生の方から提供して頂いた原案を元に執筆いたしました。主要メンバー三人の設定や独特な世界観の設定をいただき、「魔法とかの類でなく、銃などのハードボイルド系作品」というご指定の中で作成しました。わたくしの物書き人生の中では初の「ハードボイルド(もどき)」の小説です。いかがだったでしょうか？

よろしければご感想をお寄せください。続編執筆の参考にさせていただきます。よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3163a/>

デウ

2010年10月9日21時16分発行